

第6回沖縄宣教研究所・富坂キリスト教センター共同研修会 発題①

沖縄に生まれ、今、沖縄を生きる ～琉球弧の視座から～

宇佐美 節子

ハイサイグスーヨーチューウガナビラ。私はいつもこの言葉から話をスタートするようにしているんですが、ウチナーグチを沖縄に生まれたものとして大事にしているからです。琉球語、ウチナーグチ、島言葉は、私が育った環境で家族の公用語は、ウチナーグチでした。ですから、ごく自然にウチナーグチで思考し、ウチナーグチで語ることが当たり前のことでした。県外で40年近く働きましたけれども、そのときもずっと、これはウチナーグチで考えると、こういうふうなふわっとした表現になるかなと思ひ、ふと立ち止まり自分を顧みることができました。東京には、23年ぐらい住んでいたんですけども、やっぱりウチナンチュとしてのアイデンティティというものは、どこに行っても変わらない。琉球王国の末裔として生きていきたいといつも思わされておりました。

この発題をうかつにも引き受けてしまって、ちょっと早まったなといろいろ思っただけですけども、今年の誕生日で70歳になるので、やはり自分が生きてきた過程を振り返り、これからどう生きていきたいか、自分自身のそういうことも含めて、語らせていただけたらと思っています。

最初に、読谷村の出身である私の家族の歴史とルーツ、それを少し、個人的なことではあるんですが、語らせてもらったらいいかなと思っています。

私は6人きょうだいで、上に兄2人、姉1人、私は真ん中で、弟が2人います。子どもの頃は、両親と祖父母と10人という大家族で育ちました。

私は、自分の家族が好きでしたから、東京で働いていた時も毎年のように、別に何もなくても読谷村の実家に帰っていました。東京新宿にウチナー料理のお店で壺屋というとてもおいしい料理屋がありました。壺屋は、失礼ですけども、決してきれいなお店ではなかったのですが、沖縄料理はとてもおいしかったです。そこで本格的な、壺屋のおばちゃんの沖縄料理をいただいて、毎月のように帰れるわけではないので、沖縄に帰りたいなと思ったときには、信頼する友人と一緒に、その沖縄料理のお店、壺屋に行きました。

壺屋のおばちゃんのお兄さん2人は高名な絵描きさんで、お兄さんたちのすば

らしい絵が壁に飾られていて、絵が好きなものですから、この壺屋に行くだけで沖縄に帰った気持ちになるし、おいしい沖縄料理と、おばちゃんがとても独特な感性の人でいつ行ってもにぎやかで、ほっとする空間になっていました。この中にいらした方があるかどうか分からないんですけども、気に入らない人には料理も出さないし、「出てけ」というような独特なお店でした。何かものを投げたりも平気なおばちゃん、すごく面白かったですね。ウチナンチュでも出入り禁止の人も、もしかしたらいたかもしれません。私はとてもガチマヤー（食いしん坊）なので、おばちゃんにいつも歓迎されておいしい沖縄料理をたくさんいただきました。

あるとき、沖縄料理は油っぽいものが多いので、もうお店がベタベタしているんですね。それで掃除を手伝ってくれと言われて、結局おばちゃんはどこかに行っちゃって、私1人で、掃除は下手なのに、掃除した思い出があります。

何かのときに、おばちゃんの住まいにも一緒に行って、一晩泊めていただいたんです。一宿一飯の恩義というんでしょうか。ちょっとトイレが汚れていたの、私はトイレだけ掃除して帰ったんですけども。そういうおばちゃんとの濃い人間関係は、ウチナンチュ同士のチムグクルがお互い分かる、本当にそういう方でした。

私が結婚するというときに——いろいろ私の話は飛びますので、ご承知おきください——その結婚する相手、神学校の後輩で人生の先輩だったんですけども、彼をおばちゃんに紹介しようと思って——おばちゃんは、東京女子医大にそのとき入院していました——おばちゃんが一言、これは励ましだと受けとったんですが、「あんたはこれから幸せになるよ」と言ってくれました。私はそのことをおばちゃんからはなむけの言葉として、神学校を卒業して、最初の任地である愛媛松山ベテル病院のチャプレンとして、着任しました。

その松山ベテル病院は、ベテルという名前が示すとおり、神の家という意味らしく、ずっとキリスト教の精神で運営されていましたが、ホスピス病棟ができたことをきっかけに、私は初代のチャプレンになりました。がんを宣告されて3カ月の命ということでホスピス病棟に入院してきた患者さんと家族と、それから病院のスタッフが対象で、約3年おりましたけれども、新米の牧師の私には厳しい環境でしたが、普通に教会の牧師でスタートしたのではないことは、とても幸いな体験、経験となりました。

死を前にして人はいったい何を思うのか、いったい何がその人にとっての優先

順位の1位なんだろうかということ、目の当たりにしました。がんにならなければ、この方がキリスト教の礼拝に出たり、また病院内で行われる音楽セラピーに出席したりということは、たぶんなかったであろう。私たちは普通に生きていたら、教会に行ってみようかしらと思うことは少ないかもしれませんが、迫った死の前に、人はいったい何を大事にこれまで生きてきたのか、死ぬまでどのように生きるのかということは、本人にとっても家族にとっても大きな問題であると、私はそばで見ていて思いました。私自身が、その患者さんに、家族に、また悩むスタッフに、何を語ったらいいのかということは、いつも問われていました。

松山バテル病院での実践としては、やはり祈りだろうと。まず祈りからだろうということで、月に1回祈禱会を提案して始めました。招いたゲストは、病院のお医者さんであったり事務の人であったり、いろんな方に、病院との関わりとか、この病院でどういうふうにご自分の仕事を展開してきたかというようなことを語ってもらうようにして、月1回の祈禱会を通して、スタッフの悩みであるとか、またご家族の方も、キリスト教とは関係なかった環境の中にあつた方たちも、「キリスト教病院ってそういうことを大事にするんだな」と分かっていたいだり、いろんなことを展開しました。

もう食べる力もほとんどない患者さんが、お寿司を食べたいと希望されたので、地元のお寿司屋さんをお願いして病院に屋台を運んで来ていただきました。私もお寿司は好きですから、幾度となく食べに行きました。大将に来てもらって、お寿司を握って、その患者さんの口に入れたとたん、彼は満足した顔で亡くなりました。患者さんが最後に何をしたいかということを知り、その願いを実行していくのがチャプレンとしてのコーディネーターというような形だったと思うんですけども、本当に人が苦しんでいるとき、もう天に帰ろうというときに、その人が何を望むかということを知り、家族の方から伺ったりして、そういう3年間でした。私にとっても過酷な出来事の連続でしたが、他では体験できないことだったと思います。

3年たつたら本当に疲れきってしまいました、自分自身が。3年たつて、自分のこのある意味燃え尽き症候群みたいなそういうところを、どうしたらいいかと思ったときに、ちょうど連れ合いが神学校を卒業したものですから、今度は2人で広島県の神辺教会に着任しました。当時は深安郡とっていましたが今は福山市、新幹線も止まる福山市の神辺教会は、6人の全員女性の教会員でした。

私は着任しても本当には一っとしていました。あまりにも死の力に自分自身が

圧倒されて、普通の教会の牧者は何をするのか。病院がメインの仕事でしたので、どうしたらいいのか分からない。もう疲れきっていたので、神学校を卒業した宇佐美睦朗さんが、ちゃっちゃかちゃっちゃか、事務能力が高い人でしたからいろいろやってくれたし、教会の6人の女性たちが、またしっかりしたすばらしい信徒さんたちでした。地域の分区の教師会で、教師の仲間たちと宣教の働きを一緒に協力してやっていく中で私も回復して、分区の活動も楽しく展開することができるようになりました。

その広島という土地柄から、やはり平和の課題に、広島の地にある教会牧師として、沖縄出身の私ができることと、どうリンクするかということが、また一つの課題となりました。市民運動をされている隣の教会の信徒さんや、またその教会を拠点にして、市民運動、平和のための運動、外国人のための支援活動をしているグループの人たちと出会って、一緒に福山駅前でチラシを配ったり、とにかく広島の教会で、私は8年5カ月、神辺教会で奉仕しました。その過程で常に平和のこと、どうして平和にみんなが生活できないのか。自分のふるさと沖縄では、相も変わらずいろんな事件が起こり続け、両親の介護で度々帰っていますから、沖縄の現実のあまりの変わらなさ、変わらないというよりも、年々ひどくなっていくという思いがしました。

2011年に沖縄教区の石川教会の牧師に招聘され、私1人で沖縄の石川教会に赴任したわけなんですけれども、1人で牧会をすることになって、大変緊張もありましたが教会の方々と一緒に取り組みました。石川教会は、かつてはそこに捕虜収容所があった場所であり、今はうるま市でいろんな歴史的なことがある地域ですから、市民の平和活動の人たちと出会って、辺野古や高江に行き、バスの中で和気あいあいと歌ったり、語り合い充実した6年間を過ごしました。

教会は、教会の外にいる人たちとどのように関わりを持っていくかということが、とても大事で、不思議なことに、いつも地域の公民館の近くの教会の牧師になるんですね。石川も教会の後ろは公民館でした。ですから、教会で何か行事をするときは、公民館の駐車場を貸してもらい、椅子まで貸してもらいました。チャリティーバザーをすると、仲よくしている老人会の女性の先輩たちが、ソーミンチャンプルーを献品してくれたり、いろんな意味で小さな教会ですから、地域の女性たちが助けてくれました。

教会の課題は、今は高齢化であったり、少子化でしょうか。どこの教会も人数がだんだん少なくなり、1人の牧師をその教会で支えることが難しくなってい

る状況があると思うんですが、地域に開かれた教会としてのビジョンを打ち出すときに、周りの人たちがいろいろと協力してくださるということ、私は経験してきました。本当にそういう意味で沖縄という地域が、今日のこの、まあレジюмеというほどのレジюмеじゃないんですけども、詩編46編の9節から10節「来て、主の業を仰ぎ見よ。主は驚くべきことをこの地に行われる。地の果てまで、戦いをやめさせ、弓を碎き、槍を折り、戦車を焼き払われる」というこの詩編の言葉を、今回の発題を受けて、この聖書の言葉を与えられました。

平和の祈りは、今のところでたどり着いた祈りで私たちそれぞれがキリスト者として平和の祈りを、その地域で、その与えられた場所で祈っていくということが大事なのではないかということをおぼされて、このように祈りを書いてみました。いろんな人がいろんな思いで、それぞれの与えられた場所で祈りをささげること。その祈りが大きなうねりとなって、沖縄から世界に発信できるのではないかと、やはり祈りで始まるのが教会のことではないかと、私は思われています。

だから今、日本キリスト教会宜野湾告白教会、人数が少ないので伝道所という内容なんですけれども、宜野湾告白教会と表示しています。教会外の人たちは教会か伝道所かわかりにくいので、教会のいろんな掲示も全部教会となっているので、それでいきましょうと話合って、宜野湾告白教会として、クリスマスカードも書いて出しています。もうはっきり言ったら、教派の壁を越えて、教派はどこだっていいんじゃないのというのが、私の思いなんです。

日本基督教団所属のまま日本キリスト教会の牧師をするのは憲法違反だと、問安の先生に教えていただいて、はっとしました。憲法違反なら、違反したままではやはりよくないから、日本キリスト教会に加入させていただく手はずを、今整えようとしているところなんです、教派の壁ってどこかで突破しないと、これからの日本の教会、世界の教会、どうなんでしょうと、私は思っています。ただ、人間は弱いから、どこかに所属していないと足元がふらつくことがあるのかなとか、思ったりはしますけれども、私が一番最初に働いた日本聖書協会というところは、いろんな教派から職員が来ていましたので、もう最初からエキュメニカルな環境で私は仕事をスタートしたので、カトリックだろうがルーテルだろうが、聖公会だろうが教団だろうが、どこの教派でも一緒に働くときには何の障害もなかったです。どうでしょうか、皆さん。このことはあとでいろいろ、それぞれのお話を聞かせていただけたらと思うんですが、教派の壁ってあるんでしょうか。まあ、あるんだ(笑)。それはまたいろいろと議論をしていけたらいいかなと

思うんです。

沖縄の人間として私がいつも願っていることは、いつまで沖縄がこの状況のままであることを、日本全国の人たちは枕を高くして眠れるのということです。それは、私の言葉で言うと、いつまで沖縄を教材にしているんですか。教材は、学んだら、あとは自分がある場所で実践していくことが大事なんじゃないかと。

私は沖縄の人間だからということで、広島の新島教会に着任したときに、沖縄の合同問題の捉え直しの委員にと言われて、いや、沖縄出身だけど、合同の捉え直しについて、東京の教会でそういう集会もあまりなかったし、知らないなという思いの中で、その委員会に出席して、学ぶことは大事なんですけれど、学んで知識を増やして、さて何をするかということがもっと大事じゃないかなと思いました。いつまで学び続けて、いつゴールはあるんですかということですよ。

私自身は、琉球王国の末裔として、琉球が祖国復帰のときは高校2年生でしたけれども、とてもよく覚えています。雨がすごく降って、与儀公園にだと思うんですけど、どしゃ降りの中で、いったい誰が祖国日本に返って、これは涙の雨じゃないかとあとで思ったぐらい、祖国復帰したら全部万々歳かと思ったら、ますます基地が沖縄に集中してくるこの状況。沖縄を土人扱いする発言をする人。本当にどこにこの差別の根源があるのかということ、ずっと考え続けてきました。文化や言葉や伝統、歴史、一県にされてもずっとあるわけですから、沖縄が差別されるのは、私はもう差別を超えて虐待じゃないかと思ったことも多々あります。

けれども、40年近い県外での仕事を通して仲よくなった人、出会った友人たち、決してみんながみんな、よいヤマトンチュになろうとか、すごい自然体で本当に尊敬する友人たちに出会い、それはクリスチャンである、ない、関係なかったですね。むしろクリスチャンよりも思いやりのある友人。だから、いったい信仰って何だろうか。神様を信じるということは、一人一人にとってどれだけの優先順位になっているんだろうかということ、思わされました。

私たちは、主イエス・キリストが私たちの罪をあがなうために、人としてこの世に来てくださった、そのことを信じるか信じないか。もう Yes or No でしかない。中間はないと思わされて、今まできました。

沖縄に住むということは、頭の上について何が落ちてくるかわからない。そういう緊張感があると思うんですね。子ども時代のことを考えると、1人で学校から帰るとき、農道を歩いているとき、米兵たちの訓練で集団でマラソンしているのに、結構ドキッとしたり、ビクッとしながら過ごしていたことを思います。

私は2つ上の姉がいるんですけど、カトリックの信徒で、シャロームという洗礼名があるんですが、その彼女が中学生ぐらいのころに婦女暴行に、遭ったわけじゃないんですよ、遭いそうになったときに、農道にいた近所の人が気が付いて、未然に防がれた、守られたわけなんですけれども、そのことを言うのに彼女は65年もかかって。私たちは姉妹2人で仲がよくて、未遂であってもこんなにも心に深く傷を負う。沖縄のほかの友達のお姉さんもそういう経験があって、そういう話を聞いたのでざらにある話になっているわけです、基地があるがゆえに。そういう状況の沖縄をそのままにしていいいのかということが、県外に住む、今日もこの場に、ウチナンチュよりも県外から来られた方たちが多いと思うんですが、やはり問われているということ、私は思います。

それは別に責めているわけじゃないですよ。皆さんが、それぞれが、沖縄も一県であるというのであれば、沖縄だけにこういう重荷を負わせていいはずがないという感覚こそが、普通感覚でしょ。沖縄の人たちは、県外で働いたり国外で働いたりという人たちは、やはり沖縄の状況を鋭く見ていると思います。なぜこういうことがずっと続いているのかということ。

そのことに気が付いた多くの人たちが、今ゴスペルを歌う会があちこちで、その活動が始まっているというのは、ゴスペルを歌うことで平和を実現していこうという私たちの祈りと願いが皆さんに理解され、祈って歌って、私たちができる、キリスト者としての、世の見張りとしての役割を果たしていく。私自身ゴスペルを歌う会の活動が、困っていた、何かしたいけど、どうしたらいいか分からなかったんですね。

だけど、普天間基地ゲート前でゴスペルを歌う会に、そのことが起きて、とてもうれしかったのを覚えています。月曜日の夜と火曜日の朝、最初は週に2回していたんですけど、この状況が簡単に変わらないから、もう月曜日の夕方6時から1回になったんですけど、それが思いがけず10年以上も続けられるというのは、ある意味気の長い戦いだなと思うんですが、私の現場は、このゴスペルを歌う会で歌い続け、祈り続けることだと思っています。

ある人は辺野古の海で、浜で、それぞれのやり方で平和への活動をしていく。みんなが、そのことをお互いに祈り合って、その祈りこそが、私たちキリスト者の強みではないかと思っています。

私は——まとまらない話をしてあまり意味がないんじゃないかと思って、30分で終わらせてくださいと言ったんですけど——この沖縄の課題の多さに、

いつも心が重くなったりしながら、またいろんな出会いがあり、不思議な出来事があるから、続けられてきたということと、やはり仲間がいて一緒にやってこられたことが、ゴスペルを歌う会の活動の原動力になっているのかなと思わされております。

月に1回、辺野古ゴスペルに若者2人と私の3人で行く。今は月に1回だけなんですけど、行くことで、辺野古で戦っている人たちと色々な話をしながら一緒にゴスペルを歌ったりして、とてもいい交流ができていのではないかと思います。1週間に2回も3回も、辺野古や安和や宮城島や、いろんな戦いの現場に行くことはできないんですけども、連帯していく、祈りを通して私たちは連帯ができるということが、キリスト者に与えられた恵みであり祝福なんだろうなと思っています。

私、ちょっと疲れてきたので、体が弱くて、そろそろ終わって、質疑応答に入りたいと思うんですが、平和の祈りを祈らせてもらって、あとは皆さんの質問に答えていきたいと思います。

平和の祈り。生命の源である主よ、平和の君として主イエスがこの世界に人として生まれて来てくださったにもかかわらず、この世は戦いと紛争による飢餓・反目と不信に満ちています。人間の貪欲・支配欲は個人を超え、国が国を束縛し植民地とし、人権を弾圧・神の正義と平和を破壊しています。今、まさに沖縄の地で叫んでいる平和を願う人々の声を無視して戦争につながる軍事基地が日米両国によって推し進められています。神よ、この世を支配する闇の力に屈することのない勇氣、平和の道を選び取ることができるように私たちを導き助けてください。世界に向けて平和を発信している沖縄の声を、主よ、聞いてください。世の見張りとしての役割を果たすことができますように。私たちの祈りと賛美を永遠の生命に、祝福に導いてください。

2025年2月25日、宇佐美節子。以上です。